おじさんズ通信

２０２２年６月号（Ｎｏ１９）
発行元：登別市新生町４丁目桃柿通
緑風舎
発行者：おじさんズ３号

わたくし的歴史人物伝

仙台の坂本龍馬

～玉蟲左太夫～

登別の郷土史家、宮武紳一氏の「郷土史探訪　郷土史点描」を読んでいると、さまざまな歴史上の人々に出会います。その中に、この人が自刃せずに長生きしていたら、明治以降の日本が多少変わっていたかも―と興味を抱いた人物がいます。

幕末期の仙台藩士、玉蟲左太夫（たまむし　さだゆう）。

安政４年（１８５７年）函館奉行・堀利熙とともに蝦夷地を調査し、「入北記」を著しました。「郷土史探訪／点描」にも、たびたび登場し、ホロペツ会所での出来事や地元の産物などを紹介。アイヌの困窮する生活に不憫さを感じ、交易商人の狡猾な搾取に怒りを覚え、「その悪賢さ、実に憎むべきことなり」と記しました。

生まれは文政６年（１８２３年）。２４歳で脱藩し、江戸へ出て幕府朱子学者林復斎の門下生として学び、塾長を務めるまでになりました。堀は復斎の甥に当たり、そんな関係から浪人の身でありながらもその才覚が認められ、蝦夷地調査に随行することになったようです。

遣米使節団の随員に

左太夫は万延元年（１８６０年）、遣米使節団（７７人）の正使・新見豊前守正興（幕臣、外国奉行）の記録係として随行し渡米しました。この時はすでに仙台藩士として復籍していたようです。

乗り込んだ船は咸臨丸の護衛を兼ねた米国の軍艦ポーハタン号。彼は航海中における随員たちのさもしい人間模様、米人士官と船員とが助け合う姿などをしっかり記録。米国上陸後も、アメリカ社会をじっくり観察し、帰国後、８巻からなる「航米日録」をまとめあげました。

日本人で初めてビールを飲んだ男？らしい彼は、世界一周の体験やそこで得た知識を基に「食塩製造論」を書き、自ら製塩場を造るなどしました。

しかし、才気あふれる傑物に不運はつきものです。戊辰戦争が起きると藩主の命で奥羽越列藩同盟の郡務局副頭取となり、東北戦争が終結すると藩内で実権を握った勤王派に捕縛され切腹します。享年４７歳。

異国の文化を見る眼

「入北記」でその名を記憶にとどめる程度だった左太夫を見直したのは、室蘭の古書店で最近購入した「日本の書物」（紀田順一郎著、昭和５４年）の最後にあった「近代の架け橋『航米日録』」を読んでからでした。ほかの随員が異国の「文明」に驚嘆し日誌に残す中、彼は横浜帰港までの９カ月間、訪問先の「文化」を克明に記録していました。

その一節を紹介すると。

――彼の日録は（略）一日の欠落もなく、訪問した都市についてはその形勢、風俗、気候、生物、貨幣などについて、精細に見聞している。～当時の人が気がついたかどうかは知らぬが、彼には“文明”を見るのではなく“文化”を見る眼があった。――

文明は金で買えるが、「民族」「地域」「宗教」「言語」などの文化は金では買えないといわれます。

仙台の坂本龍馬、捕らえられる前日に、榎本艦隊が到着して函館に逃げ延びていたら…。歴史に「もしもは禁句」重々承知ノ助でありますが、やはり惜しい。

主夫の雑記帳

消えた！　何が？　玉葱が

この見出しを見て、フランスの詩人アルチュール・ランボーの詩「永遠」を連想された方は、なかなかのポエム通です。もっとも、「あの大詩人の名作をオチョクルとは何事だ！」と、お叱りを受けそうですが。

玉葱がしばらく消えた場所ですが、店頭ではありません。折り込みチラシでした。産地の不作で高値が続き、スーパーも広告チラシに載せづらいのでしょうか。

ちなみに「永遠」の冒頭はこうです。

「見つかった／何が？　／永遠が／海が／太陽にとけこむ　（略）」（柴田駿訳）

またも、怒りの鉄拳がとんできそうですが、今朝のチラシを見たら「佐賀産新たまねぎ１玉９５円」とありました。主夫感覚からすると、やはり高い！

緑陰あーと

漱石とターナー

NHK のテレビ番組「日曜美術館」を見て、（時間はたっぷりあるが、そこへ行く金がない）とボヤクばかり。ならばと、朝日新聞日曜版「世界名画の旅」シリーズの再録文庫本がひょっこり出てきたのを機に最近、庭で「ポケット・アート緑陰読書会」とシャレ込んでいます。

第３巻のイタリア編で、イギリスの風景画家ターナーが取り上げられていました。代表作「金枝」の解説あれこれに続いて、目を引いたのは美術評論家、高階秀爾氏の「漱石とターナー」と題する文章でした。

ターナーの「雨、蒸気、速度～」（プリント）を飾り、即席ミニ・ガーデン美術館オープン

夏目漱石の小説「坊ちゃん」。赤シャツと野だいこが、ターナーの名を挙げて会話する場面を紹介していいますが、途中まで読んで

「ターナー？　たしか『草枕』にも出てきたはず」

と、早速、棚から取り出して開いてみたら、ありました。

その箇所を抜き書きすると

「ターナーが汽車を写す迄は汽車の美を解せず、応挙が幽霊を描く迄は～」

「ターナーが或る晩餐の席で、皿に盛るサラドを見詰めながら、涼しい色だ、これがわしの用いる色だと～（略）～この海老と蕨の色をちょっとターナーに見せてやりたい～」

と、かなりの惚れ込みようです。

ターナーの汽車とは

「漱石自身はロンドン留学中に熱心に美術館めぐりをしているから、もちろんターナーの作品もよく知っていたに違いない」と高階氏は述べていますが、さて、「草枕」に出てくる汽車の絵とは？

調べてみたら、ロンドンのナショナル・ギャラリーに収蔵されている「雨、蒸気、速度――グレート・ウェスタン鉄道」（油彩、９１cm×122cm、１８４４年制作）がそれのようです。

ネット検索するとミュージシャンの山下達郎がこの絵を題材にした楽曲を１９９１年に出すなど有名な作品で、知らなかったのは門外漢の私だけかも。

ともあれ、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ」でおなじみの、一画工である「余」を主人公にした青春小説を再び手にして、この物語の中に、どれだけの作家、芸術家、文人、墨客たちが登場するのか、あらためて数えてみました。

シェレーにはじまり・・・

四の五の言わずに列記すると

シェレー、王維、レオナルド・ダ・ビンチ、ミレー、高泉和尚、隠元、即非、木庵、若冲、大慧禅師、ターナー、サルワトル・ロザ、運慶、北斎、ウォーツウォース、文与可、雲谷、大雅堂、蕪村、雪舟、レッシング、ホーマー、ヴァージル、ラオコーン、スインバーン、山陽、春水、徂徠、広沢、岩佐又兵衛、スターン、晁補之、オスカー・ワイルド、ミケルアンゼロ、ラフハエル、グーダル、イプセン。

書き洩れがあるかもしれませんが、ざっと数えると４０人。原稿用紙を前に、これらの人物がすらすら頭に浮かぶ漱石先生、やはり天上に仰ぎ見る偉大なる文豪でした。

薫風　烈風

▶週１回の店を３月末にやめて、おヒマでしょう、と聞かれるのですが、結構、忙しいのです。春には溜まった端材を活用して、庭にウッドデッキもどきを制作。背板がバラバラになったウン万円した椅子を再組み立てして、半面を弓形に削った角材を脚に取り付け揺り椅子（安楽椅子と呼ぶそう）に改良、天気のいい日はそこに座りコーヒー片手に緑陰読書です。

▶登別映像機材博物館をたたみ、この春札幌に移転した山本 BIN 氏からＪＲ白石駅近くに構えた「札幌映像機材博物館」を６月１６日にプレ・オープンさせるとの便りあり。ついては、映画のフィルムを組み込んだ来館記念しおりを２０～３０枚作ってほしいとの注文もあり、これから忙しくなります。

▶最近、これネタになるな、と思った事が数日後にはすっかり頭から消えてしまいがちで、「こりゃ、認知症の予告シグナルか」と備忘録に頼る始末。加えて、今回も、ネタをどうするかあれこれ思案の末、発行の目安とする１５日前後にギリギリ間に合わせた次第。「いよいよ廃刊宣言か」と、２０号を目前に青息吐息。たったＡ４判２ページのペラ通信なのですがね～。現役時代に旨としていた取材の心得―「例えばマチの街路灯だって、歴史をたどれば記事になる」精神で、行きましょうか。オホーツク海高気圧が威張る冷夏に御用心。それでは皆さん、お元気で～。